
仮面ライダーディケイド ~ New World ~

深津士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜New World〜

【Nコード】

N5623M

【作者名】

深津士

【あらすじ】

新しい世界を巡る旅に出た士、夏海、ユウスケ、海東。次の世界で出会ったのは仮面ライダーではない戦士達。ディケイドよ、彼らとともに復活した悪に立ち向かえ！

ディケイドとスーパー戦隊とのクロスオーバー作品。

序章〱はじめ〱（前書き）

はじめまして。

深津士という名で小説を書かせていただいています。

今回は私が好きなディケイドとゲキレンジャーをコラボさせて
この小説を書きました。

何分、初の投稿で至らない点、読みにくいところがあるとおもいま
すが、

どうぞ、よろしくお願いします。

序章〜はじまり〜

―これまでの仮面ライダーディケイドは―

「俺はすべての破壊者だ。俺はそれを受け入れた。」

「士、俺がおまえを倒す。」

「私が、士君を止めてみせます。」

「夏海は行きたまえ。士の写真、僕も見たい。」

「おまえは、おまえはいつたい何なんだ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

「こうやって私達の旅は続いてくんでしょか。」

「ああ、俺は旅を続ける。なぜなら、旅そのものが俺の世界だからな。」

「よし、行くぞ！」

序章〜はじまり〜

スーパーショッカーを倒し、再び旅に出た仮面ライダーディケイドたち。

彼らはまた新しい世界に来ていた。

―光写真館―

写真館のいつもの場所には、いつものメンバーがいた。

「士君、今度はどんな世界なんでしょう。」

新たに降りてきた背景ロール―赤、黄、青、紫、白の動物にどこかのビル、そしておそらくその会社のマークであろう図が描かれている―を見ながら、光夏海はそばにある丸い机でコーヒーを飲む門矢士に問いかけた。

「さあな。ま、とりあえずこのマークの会社を探してみるか。」

士はそう答えた外へ向かう。となりに座っていた小野寺ユウスケも後を追うようにして立った。

「あれ、そういえば、海東は？」

ユウスケは部屋を見回しながら、いつから仲間になった海東大樹がいないことに気付いた。

「ああ、大樹君なら今朝早くに『この世界のお宝を探してくる』って出て行つたよ。」

夏海の祖父である光栄二郎はコーヒを片付けながら言った。

「いいのか？士。」

それを聞いてユウスケが士に言った。

「ああ。あいつはあいつで勝手に調べるだろ。」

士はさほど気にしていないように言った。

「それじゃあ行つて来ます、おじいちゃん。」

夏海は栄次郎に言い、三人は外へ向かう。

「行つてらっしゃい。気をつけるんだよ。」

「行つてらっしゃあ。ああ、栄ちゃん、そこそこ。」

栄次郎は小さく白いコウモリ、キバーラのマッサージをしながら見送った。

三人が外に出ると士の衣装がいつものように変わった。

「カンフーですか？」

「カンフーっぽいね。」

夏海とユウスケの言葉通り、カンフー映画に出てきそうな黒い中国服のようだ。

「この世界で俺のすべきことは何だ？」

士はそう呟き、

「とりあえず、このマークを調べてからだな。」

と二人に言った。

光写真館でいつものやりとりが行われている頃、この世界のある場所でもいつもの日常が過ぎていた。

―スクラッチ社特別開発室―

そこにはカラフルな上着を着た三人の若者と彼らよりも少し年上のスーツを着た女性。

その部屋に、白いジャージの青年と服を着て猫の姿をしたものが入ってきた。

「ああ！猫、ケン、久しぶりだなあ！」

赤い上着を着た青年、漢堂ジャンはその猫に飛びつくように抱きついていた。

「おお、ジャン。帰っておったのか。」

その猫、マスターシャーフーはジャンを受け止めながら嬉しそうに言った。

「マスターシャーフー、俺も帰ったぜ。」

紫の革ジャンを着た青年、深見ゴウもシャーフーに近づき、そう言った。

「ゴウも帰ったか。どうじゃったかのう、旅は。」

シャーフーはゴウに問いかけた。

「まあまあってとこかな。面白い話もいくつか聞けたしな。まあ、バエとはまたはぐれちゃったけど。」

ゴウはそう言いながら苦笑した。

「あれ、そういえば、レッツは？」

ケンと呼ばれた白いジャージを着た青年、久津ケンはいつもの仲間が一人いないことに気がついた。

「レッツならちよつと出かけてくるって、さっき出て行ったわ。」

黄色い上着を着た女性、宇崎ランがオレンジのロボットと手合わせをしながら言った。

「たぶん絵を描きに行ったんじゃないかしら、最近、気に入って

る場所があるって言ってたし。」

スーツを着た女性、真咲美希がコーヒーを手に言った。

「まったく、あいつは変わんねえな。」

ゴウがこぶしを額に当てながら言った。

その話題の人物である青い上着を着た青年、深見レツはお気に入りの場所である小高い丘に来ていた。

その丘にある木の下でレツはそこから見える景色を描いていた。

（何か、何か足りない…）

レツは大方仕上がった絵を見ながら考えた。

（何だ？何が足りない？）

そう自分自身に問いかける。

そんなことを考えているうちに下から人がやってきた。

「土君、どこ行くんですか？」

「そうだよ、土。こっちに何かあるのか？」

「いや、わからん。勘だ、勘。…ん？」

先頭を切って歩いてくる青年、土はレツがいるのに気付いたようだ。

「あ、あの人に聞いてみましょうよ、このマークについて。」

髪の高い女性、夏海がそういつて近づいてきた。

「すみません、ちょっといいですか？」

先ほどの青年よりも背が低い青年、ユウスケがレツに話しかけた。

「何ですか？」

レツは三人の方を見た。

「あの、このマークの会社なんですけど、どこにあるかわかりますか？」

夏海がそのマークを見せながら言った。

「…ん？君達、スクラッチに何か用があるの？」

レツは自分が所属する会社のマークを見せられたことに驚いた。まさかこんなところで目にするとは思っていなかったからだ。

「スクラッチ？…お前、その社員か。」

士はレツの胸にそのマークがあることに気付き言った。

「まあ、一応ね。」

レツはそう答えると、

「で、君達はスクラッチに何か用？」再びそう聞いた。

「あの、俺たちそのスクラッチつてとこに行きたいんですけど…」

ユウスケはそう言った。

「じゃあ、これから戻るから一緒に行くかい？」

それを聞き、レツはそう提案した。

「本当ですか？ありがとうございます。」

夏海はお礼を言った。

それから四人はレツの片づけを待ち、丘を降りた。

―地下倉庫―

とある世界の地下倉庫には一人の青年がいた。

その青年、海東大樹は倉庫からあるものが消えていることに気付いた。

（くそつ、やられた…）

海東は自分が出し抜かれたことを悔しく思った。

そして、その出し抜いた人物がいる場所を思い浮かべ、その場所へ向かった。

―屋上―

その屋上にはコートに帽子をかぶり、メガネをかけた中年の男がいた。

「ディケイド…ここがお前の最後の旅だ…」

その男、鳴滝はいつもの決め台詞ごとくそう呟いた。

「やっぱりここでしたか、鳴滝さん。」

突如オーロラから現れたのは海東。

「ディエンド、君とディケイドは相容れない存在のはず。その君が

なぜディケイドと行動をとみにしている？」

鳴滝は海東にそう聞いた。

「言っただろう？士たちも僕のお宝だからさ。」

海東はそう答え、

「そんなことより、僕のお宝を盗んだのは君だよ？返してもらおう。」

と言い、鳴滝にディエンドライバーの銃口を向けた。

「あれはもうこの世界の獣にやった。すぐに君達の前に現れるだろう。」

鳴滝はさしておびえる様子もなく言った。

「なるほどね。君の魂胆はだいたいわかった。ただ覚えておきたまえ、僕の邪魔をするものはすべて倒すつてことをね。」

海東はそう言うのと再びオーロラの中へ消えた。

――洞窟――

洞窟の中には四つの影があった。

「ああ、なんと退屈なことでしょうか……」

女性の影はいかにも退屈そうに言った。

「結局、蘇ったのは我ら四人だけのようじゃの。」

老人の影はさほど気にする風でもなく言った。

「悲鳴……絶望……欲しい。」

男性の影は単語だけで言った。

「じゃあ、そろそろやつちやいますか！」

子供の影はいかにも楽しいといった感じで言った。

四人の影が動き始める。

序章はじまり（後書き）

序章はいかがだったでしょうか。

このように小説を書くのは初めてに等しいのでキャラの書き分けが難しく、

「こんなの。。。じゃない！」っていう声もあるかと思います。

また、どのくらいの文章量がいいのかということもわからないままはじめたので、

序章にしては長すぎかなと思いましたが、その辺は多めに見えていただけるとうれしいです。

今回はディケイド一行とゲキレンジャーが対面、そして臨獣殿が登場する、

予定です。

予定は未定といいますが…でも、そうなるように努力します。

では、長々とお付き合いありがとうございました。

追記：地の文とレッツと海東のセリフを少し変えました。

再追記：読み直しておかしい地の文を変更しました。

第一話 ソワソワ、臨猷殿復活！（前書き）

どうもこんにちは、深津士です。

いよいよ第一話です。

先に謝っておきます。

すみません。

とりあえず、見ていただければわかると思いますが、

言い訳はあとがきのほうでしたいと思います。

では、どうぞご覧下さい。

第一話 ソワソワ、臨獣殿復活！

―これまでの仮面ライダーディケイドとNew Worldは―

「土君、今度はどんな世界なんでしょう。」

「カンフーっぽいね。」

「とりあえず、このマークを調べてからだな。」

「ああ！猫、ケン、久しぶりだなあ！」

「…ん？君達、スクラッチに何か用があるの？」

「スクラッチ？…お前、その社員か。」

「ディケイド…ここがお前の最後の旅だ…」

「ただ覚えておくといい、僕の邪魔をするものはすべて倒すってことをね。」

「じゃあ、そろそろやっちゃいますか！」

第一話 ソワソワ！臨獣殿復活

―スクラッチ特別開発室―

そこではお昼を食べながらゴウたちの旅の話を聞いていた。

「俺ら、道に迷ってジャングルに入っちゃったんだ。そのとき、現地の奴に助けられて、そこで面白い話を聞いたぜ。」

ゴウがそう言うと、

「面白い話？どんな話なの、ゴウ。」

美希が聞いた。

「なんでも、最近、灰色のオーロラが現れて、そこから変な怪物をつれた男が出入りして、何かを探してるらしい。」

ゴウはそう話した。

「オーロラから人が？作り話じゃない？」

「そうそう、そんなことあるわけないって。」

ランとケンはそう言いながらラーメンをすすった。

「俺も最初はそう思ったんだが、実際に見ちまったからな。」

ゴウはそう答え、肉まんにかじりつく。

「ゴウは会ったのか？その男に。」

ジャンがラーメンをすすりながらそう聞くと、

「いや、男とは会わなかった。だが、怪物となら戦った。」

ゴウはそう答えた。

「怪物？どんな？」

ランはそう聞きながらお茶をすする。

「体にステンドグラスみたいな模様があるライオンみたいな怪物だったな。」

俺がジャングルを歩いてると、いきなり『ライフエナジーをもらう』とか何とか言っていきなり襲い掛かってきやがった。

ま、ちよつと戦ったら逃げていきやがったけどな。」

ゴウはそう答えた。

「…何やら不穏な気を感じるのう。それも、ここ最近、急に増えてきておる。」

シャーフはそう言いながらお茶をすすった。

「もしかすると、また戦いが始まるやもしれん。」

シャーフは四人の若者を見てそう言った。

―街中―

その頃、スクラッチ近くの通りでは、土、夏海、ユウスケが自己紹介を終えて、レッツが三人に名刺を渡していた。

「スクラッチ特別開発室所属アスリート 深見レッツ：レッツさんはスポーツ選手なんですね。」

夏海は名刺を見ながら言った。

「何のスポーツをしてるの？」

ユウスケが聞くと、

「スポーツじゃないんだけど…君達は獣拳って知ってる？」

レツはそう訂正しながら問いかけた。

「…ジユウケン？何だそれは。」

士はそうレツに聞き返した。

「獣の力を心に感じ、獣の力を手にする拳法、それが獣拳さ。」

レツは誇らしげにそう答えた。

「へえ…そんなものがあるんですね。」

夏海は感心したように言った。

「…獣？…もしかして…」

士は何か思い出したかのように呟いた。

――スクラッチ特別開発室――

昼食を終え、彼らは思い思いに過ごしていた。

「――…ソワゾワだ！」

ジャンは邪悪な雰囲気を感じ、そう言うのと部屋を飛び出していった。

「ジャン！私達も行くわよ！」

「「おう！」」

ランがそう言い、ゴウとケンもジャンに続いて部屋を飛び出していた。

「いよいよ動き出したようじゃの、新たな敵が。美希、レツにも詳しい連絡を。」

シャーファーは何かを見据えるかのごとく目を見開いてそう言った。

「はい。…臨獣拳反応が菊園第三ビルの近くで見つかりました。」

美希はシャーファーにそう言うのとレツへと連絡するため通信機を手にした。

――街中――

四人はスクラッチの近くまで来ていた。

そのときレツが腕につけている“ゲキチェンジャー”に通信が入った。

『レツ！聞こえる？』

美希の焦った声が聞こえる。

「美希さん、どうしたんですか？」

レツは美希に応答した。

『臨獣拳反応が現れたわ！今スクラッチの近くよね？』

ジャンたちも行ったから、合流して菊園第三ビルに向かってちょうだい！』

美希はそういうとやや乱暴に通信を切った。

レツは臨獣拳という言葉に驚いた。

しかし、真剣な顔つきになり、今のやり取りと状況が読めていないだろう三人に向き合って、

「ごめん、ちよつと用事ができたんだ。スクラッチはここをまっすぐ行って右に曲がればすぐわかると思うから！

悪いけど、これ、受付に渡しておいて！」

そう言い、持っていた美術道具を夏海たちに渡して急いで道を戻っていった。

「…何があつたんでしょうか？」

夏海は走り去るレツを見ながら言った。

「…とりあえず、スクラッチまで行きますか。」

ユウスケがそう言くと、

「いや、あいつを追うぞ。この世界のことかわかるかもしれん。」

士はそう言つとレツの後を追って走り出した。

「ちよつと待ってくださいよ、士君。」

「おい、待てよ、士！」

夏海とユウスケも士の後を追った。

― 菊園第三ビル前 ―

『キヤー！』

『うわー！』

悲鳴を上げて逃げ惑う人々。

つい先ほどまでは普通の、平凡な日常であった。

しかし、それは、突如現れた怪物によって破壊されてしまった。

ビルは崩れ、襲われた人々の悲鳴やうめき声。

その中で嬉々としているのはその状況を作った張本人たちだけである。

「んふふふ！なんていい悲鳴なんでしょう！」

女性のような姿に星の形を体のあちこちにつけた怪物が言った。

「悲鳴…絶望…もっと…もっと…！」

大きな黒い体に鼻が細長く、頑丈そうな鎧をつけた怪物が言った。

「久々に見るが、やっぱりいいもんじゃ、人間の悲鳴を上げる姿は。」

大きなフクロウのような姿で飛び回っている老人のような怪物が言った。

「やっぱり楽しいね！弱いものをいたぶるのは！」

バッタのように飛び跳ねながら子供のような口調の怪物は言った。

「そこまでだ、臨獣殿！」

そこに走ってきたのはジャンだった。

少し遅れて、ラン、ゴウ、ケン、そしてレツもやってきた。

「臨獣殿にまだ残党がいたのか！」

ゴウはそう怪物、臨獣拳使いたちに言った。

「それはちよつと違うんじゃないのう。」

老人の臨獣拳使いが言った。

「そうそう、僕達は残党じゃなくて、蘇ったんだよね。」

子供っぽい臨獣拳使いが言った。

「残党でも蘇ったものでも関係ない！人々を襲うなんて許さない！」
ランがそう言うと、

「そうだ！獣の力はそんなことのために使うものじゃない！」

「そうそう。女の人を泣かす奴は俺が許さないよ？」

レッツとケンも続けてそう言った。

「さつきから、何ですの？あなたたちは。」

女性の臨獣拳使いは言った。

「邪魔する…許さない…」

黒い大きな臨獣拳使いは言った。

臨獣拳使いたちは改めて戦闘の体勢をとった。

「みんな、いくぞ！」

「……おう！（うん！）」……ジャンの合図に四人はうなずいた。

「……たぎれ、獣の力！」……

ジャン、ラン、レッツの三人が、

「響け、獣の叫び！」

ゴウが、

「研ぎ澄ませ、獣の刃！」

ケンが、

「……ビースト・オン！」……

声をそろえて叫ぶ。

ジャン、ラン、レッツはゲキエンジャーのスイッチを押して、

ゴウはゴングチェンジャーのゴングを鳴らし、

ケンはサイブレードのスイッチを押した。

すると、今まで彼らがいた場所には赤、黄、青、紫、白の戦士の姿が。

「……燃え立つ激気は正義の証！獣拳戦隊ゲキレンジャー！」……

五人は声をそろえて名乗りあげた。

「お前らがあの拳魔たちを倒したというゲキレンジャーのようじゃの。」

老人の臨獣拳使いが言った。

「せっかくだから、私達も名乗っておきましょうか？」

女性の臨獣拳使いが言った。

「そうだね。それ楽しそう！」

子供っぽい臨獣拳使いも言った。

「では、私から。臨獣スターフィッシュ拳使いのトデヒ。」

女性の臨獣拳使い、トデヒが言った。

「臨獣オウル拳使いのフロウク。」

老人の臨獣拳使い、フロウクは言った。

「臨獣臨獣ティパー拳使いのクーバ。」

黒い大きな臨獣拳使い、クーバは言った。

「臨獣ローカスト拳使いのツバタ。さあ、いくよ！」

五人の獣拳使いと四人の臨獣拳使いは今、ぶつかり合う。

その様子を影から見ていたのは士、夏海、ユウスケの三人。

「やっぱりな。」

士は彼らのやりとりを見てそうつぶやいた。

「やっぱり、ってなんだよ、士。」

ユウスケは土に聞いた。

「ここは、ゲキレンジャーの世界ってとこだな。おそらく、あの背景の動物の絵はあいつら、ゲキレンジャーのことだろ。」

士はそう答え、

「ま、とりあえずこの戦いがどうなるか、だな。」
と呟いた。

第一話 ソワソワ、臨獣殿復活！（後書き）

予定は未定っていうことを改めて実感しました、第一話。

序章のあとがきにはゲキレンジャー一行とディケイド一行が対面とあつたんですが、

やっぱり無理でした…

文章を書くって難しいですね。

次回こそは対面させたいと思っているのですが…

それから、気付いた人もいらっしやるかと思いますが、レッツの出番が多いことに。

ぶっちゃけ、作者はレッツが好きです。

なので、これからも多少出番が多いかと思いますが、できるだけ均等に登場させようと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

追記：ランのセリフの間違いを直しました。

第二話 獣の拳士と仮面の戦士（前書き）

お待たせいたしました。（待っていないかもしれませんが…）

今回はちよつと長いです。

言い訳やらなんやらはあとがきでしますので、

とりあえず本文をご覧ください。

第二話 獣の拳士と仮面の戦士

「これまでの仮面ライダーディケイド New World は――

「なんでも、最近、灰色のオーロラが現れて、そこから変な怪物をつれた男が出入りして、何かを探してるらしい。」

「……何やら不穏な気を感じるのう。」

「獣の力を心に感じ、獣の力を手にする拳法、それが獣拳さ。」

「――ゾワゾワだ！」

「そこまでだ、臨獣殿！」

「そうそう、僕達は残党じゃなくて、蘇ったんだよね。」

「……ビースト・オン！」「……」

「……燃え立つ激気は正義の証！獣拳戦隊ゲキレンジャー！」

「……」

「ここは、ゲキレンジャーの世界ってとこだな。」

「ま、とりあえずこの戦いがどうなるか、だな。」

第二話 獣の拳士と仮面の戦士

「リンシーズ！」

フロウクが呼ぶとどこからともなく、黒と茶色の服を着て飛び跳ねるようにして動く下級兵士たちが出てきた。

「お前らの相手は俺だ！とりゃ！」

白い拳士、ケンは下級兵士であるリンシー達に飛び掛りながら言った。

「はあ！ふっ、はっ、はあ！」

黄色い拳士、ランはトデヒに攻撃をしかけた。

「ふっ、はっ、あなたが私の相手をしてくださるの？」

トデヒはランの攻撃を軽くかわしながら言った。
「っふ、っふ、はあっ！」

青い拳士、レッツはフロウクに向かって行った。

「っふ、っは、この余興、楽しくなりそうじゃの！」

フロウクはレッツを軽くあしらいながら言った。

「はあ！っふ、おりゃ！」

紫の拳士、ゴウはクーバに攻撃した。

「…っはあ！邪魔…許さん…」

クーバはゴウの攻撃をかわして呟いた。

「っは！やあ！こんにゃろ！はあ！」

赤い拳士、ジャンはツバタと戦っていた。

「ふっ！はっ！あははは、楽しいね！」

ツバタはジャンの攻撃を簡単に避けながら心底楽しそうに言った。

「…伸伸打！」

ランはトデヒから間合いを取り、ゲキトンファアをロングバトン形態にしてトデヒを放り投げようと突いた。

「っふ！そんな攻撃効きませんわ。」

トデヒはそう言いながら体の柔らかさを生かして後ろに仰け反り攻撃をかわした。

「…うおりゃ！」

そんな雄たけびとともにランを飛び越えてケンハトデヒをサイブレードで真っ二つにぶった斬った。

「リング、体分裂！」

斬られたはずのトデヒからその言葉が聞こえた。

「そんな！」

「マジで？」

ランとケンが呟いた。

トデヒの二つになった体が失った部分を補うかのように修復され始めた。

呆然としている二人の前には二体になったトデヒがいた。

「痛いではありませんか。」

二体のトデヒはうんざりしたかのようにそう言った。

「今度はこっちからいきますわね。」

「リング、流星落下！」

そう言うとき呆然としている二人に向かって、自分の体にある星を一つ取り投げつけた。

「うわぁ！」

投げつけた星は複数に分裂し、二人の頭上に降り注ぎ爆発した。

「そろそろ飽きてきたのう。悪いが我的世界に戻らせてもらっぞ。」

フロウクはそういうときレツからいったん離れた。

「お前の世界、だど？」

レツは構えを崩さずそう聞いた。

「そう、我的世界。」

フロウクはそう言うとき翼を広げて飛び上がった。

そして、そのまま猛スピードで空を飛んでいる。

「我的世界、すなわちこの大空すべてが我的世界のテリトリーじゃからなの。」

レツにはその声しか聞こえない。

「お前の世界が空というなら、こうするまでだ！…スーパービースト・オン！」

レツはスーパーゲキクローを取り出し、掛け声とともにスイッチを押してスーパーゲキブルーに変身した。

「スーパージャガー撃スペシャル！」

そう言うときレツは高く舞い上がった。

しかし、フロウクは余裕そうな表情で言った。

「まだまだ遅いのう。ほれ！」

「つく！」

「リング、飛翔舞！」
ひしよのまい

フロウクはレッズを叩き落すと急降下し、四方から襲い掛かった。

（くそっ、こいつ鎧が硬くて、攻撃が全然効いてねえ…）

ゴウはクーバに攻撃しながらそう考えた。

（あの鎧を壊すことができれば…）

ゴウはクーバから少し離れ、

「輪輪拳！」

とゲキワザを繰り出し、

紫激気を集中させたアッパーカットから放つ車輪状のエネルギー波で鎧を両断しようとした。

「っふ…」

「何！」

しかし、クーバはそのエネルギー波を自らの臨気で相殺した。

「俺…強い…お前…弱い…」

クーバは何の感情も込めずにそう言った。

「っくそ…」

ゴウは構えを崩さず次の手を考えていた。
そのとき、

「「うわぁ！」」

「っく！」

ラン、ケン、レッズの苦しむ声が聞こえた。

「ラン、ケン、レッズ！」

ゴウはクーバから一瞬気をそらしてしまった。

「リング…夢幻地獄…」

クーバはその隙にゴウに向かってリングを放った。

ゴウの周りに突風が吹いた。

「っうわぁ！」

目の前が真っ暗になり、気がつくと目の前には仲間達が力なく横たわる姿が。

「な…ぜだ…」

ゴウはあまりの光景に戦意喪失して膝をついた。
いつの間にか変身も解かれていた。

「俺…強い…お前…弱い…」

頭の中で先ほどのクーバの言葉が繰り返される。

「お前…終わり…」

いつの間にかクーバが後ろに立っていた。

ゴウにクーバの長い爪が振り下ろされようとしたそのとき。

「っぐは！」

クーバは足下から煙を上げ後ずさりした。

「すっかりしたまえ、狼君。」

ゴウが声の方向を見ると

外はねの髪が特徴的な、青い銃らしきものを持った青年がいた。

「さて、そのバク君。僕のお宝返してもらおうか？」

「っああ、もう！お前！ピョンピョンしてないで、ちゃんと戦え！」

「ええ？もつと楽しく戦おうよ、ねえ？」

ジャンはツバタと対戦しているのだが、ツバタは先ほどからジャンの攻撃を飛び跳ねてかわしているだけ。

「じゃあそろそろ僕もやつちやおうかな！」

そう言うツバタは飛び跳ねながら口から拳大の弾を数発ジャンに向かって勢いよく吐き出した。

「…っとう、そりや！よつと！…っわあ！」

ジャンはゲキヌンチャクを使って打ち落としたが、弾の速さと数で数発食らってしまった。

「次いくよ！」

ツバタはジャンが体勢整える前に次を発射し、ジャンはすべてを食らってしまった。

「っく…」

ジャンは立ち上がろうとした。

「何、まだやるの？じゃあ、スペシャルバージョン君にあげる！」
ツバタはそう言つと、さっきよりも高く跳び、そして大きな弾を发射した。

「うわぁ！」

ジャンは避ける余裕もなくまともに食らってしまった。

「つくそ…」

ジャンは悔しそうに呟いた。

「ゲキレンジャーって噂で聞いてたよりもたいしたことないんだね。」

「

「そうそう、期待はずれでしたわ。」

「もつと楽しませてくれると思ったのにのう。」

「…」

臨獣拳使いたちは再び集まって口々にそう言った。

目の前には苦しむゲキレンジャーたち。

「何だ、もう俺の出番なのか？」

ゲキレンジャーたちの前に立った一人の青年。

「君は…」

レッツが青年を見て呟いた。

「何者じゃ、貴様。」

フロウクが聞いた。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ。…変身！」

青年、士はそう言つとバックルを腰に当て、カードを装填した。

『Kamen Ride Decade』

電子音が聞こえ、士の姿はマゼンダ色を貴重としたボディにバーコードのような線が入り、緑色の目をした戦士、仮面ライダーディケイドに変わった。

『Attack Ride Blast』

士はカードを装填しライドブッカーをガンモードにして発砲した。

「つく…」

「…ここはいったん退かせてもらいますわ。」

攻撃を食らった臨獣拳使いたちはそう言うと、現れたオーロラに姿を消した。

「ちょっと、土君、急に出て行くからびっくりしたじゃないですか！」

「そうだよ、土。それにあいつら追いかけてよかったのか？」
いつの間にかやってきていた夏海とユウスケは土にそう言った。

「どうせまた出てくるだろ。」

土は変身を解いて、二人に答えた。

「なあなあ、お前すげえな！カメライダーって！」

ジャンは立ち上がりながら、土にそう言った。

「違う！カメライダーじゃなくて仮面ライダーだ！」

土は否定しながらジャンのほうを振り返った。

「あなたたちは？」

ランは三人に聞いた。

「門矢さん、あなたはいつたい……」

レツも土に説明を求めた。

「……臨獣殿ではなさそうだな。」

ゴウも訝しげに三人を見た。

「それより……君、何ていうの？かわいいねえ！」

ケンも夏海をナンパし始めた。

「え？ちょっと！」

ゲキレンジャーの五人が三人に詰め寄り始めた。

「……わかったから、とにかく落ち着け。」

土はケンに言い寄られて困っている夏海や質問攻めになりそうなユウスケを下がらせ、五人に言った。

そんな中五人のゲキチェンジャーに通信が入った。

『みんな、その三人をスクラッチまでお連れして。』

美希が言った。

「え？……わかりました。」

ランが答え、

「じゃあ、皆さんついてきてください。」
そう言った。

「ちよつと待て、海東いるんだろ？お前も行くぞ。」
士は行こうとしていた他の面々を止め、そう言った。

「さすがだね、士。気付いてたんだ。」

ビルの陰から青い銃持った青年、海東が出てきた。

「当たり前だろ。」

士はそう言った。

「お前はさっきの…」

ゴウが驚いたようにそう言った。

「やあ、狼君。悪夢から覚めたかい？」

海東はそう返した。

第二話 獣の拳士と仮面の戦士（後書き）

やっとゲキレンジャーとディケイドたちを合わせることができました。

この戦闘シーンを書くだけで一ヶ月ぐらいかかってしまっ…

頭の中ではほんの数秒のことなのが文字にするとかなりの行数になってしまい、苦労しました。

他の作家さんが一週間に一回ぐらい更新していらっしやるのはすごいなと、改めて思いました。

今回はスクラッチでの話が主になると思います。

でも、予定は未定なので、自分でもどうなるかわかりません。

次はもっと早く更新できるようにがんばります。

では、読んでくださりありがとうございました。

第三話　グリングルン、修行開始（前書き）

お久しぶりです。

4ヶ月間ほったらかしにしていたすみませんでした。

いろいろ書き方が変化しているかもしれませんが、

大目に見てください。

それでは、どうぞ。

第三話　グルングルン、修行開始

―これまでの仮面ライダーディケイド〜New World〜は―

「…伸伸打！」

「そんな！」

「マジで？」

「リング、流星落下！」

「我的世界、すなわちこの大空すべてが私のテリトリーじゃからなう。」

「スーパージャガー撃スペシャル！」

「俺…強い…お前…弱い…」

「うわぁ！」

「つく！」

「な…ぜだ…」

「しっかりしたまえ、狼君。」

「じゃあそろそろ僕もやっちゃおうかな！」

「うわぁ！」

「何だ、もう俺の出番なのか？」

『Attack Ride Blast』

「門矢さん、あなたはいつたい…」

『みんな、その三人をスクラッチまでお連れして。』

「お前はさっきの…」

「やぁ、狼君。悪夢から覚めたかい？」

第三話　グルングルン、修行開始

「兄さん、さっきのつて？」

レツは海東を見て驚いているゴウにそう言った。

「え、ああ……」

「君の兄さんを間一髪のところでは助けてあげたのさ。感謝したまえ、ジャガー君？」

海東は言葉に詰まらせているゴウをさえぎりそう言った。

「……とにかく、スクラッチに行くぞ。話はそれからだ。」
士が言い、皆を促した。

――スクラッチ社特別開発室――

「おお、帰ってきたようじゃの。」

「おかえりなさい、皆。」

帰ってきた面々にシャーファーと美希が声をかける。

「……ただいま戻りました、マスター、美希さん。」

「ただいまー、猫、美希。」

「……猫？」

シャーファーを見て士たちは一瞬身構えた。

「おお、よく来たのう。」

「猫が……」

「しゃべった……」

シャーファーの言葉にユウスケと夏海が呆然と呟いた。

「私達の師匠、マスターシャーファーです。」

ランが四人に説明した。

「なるほど。さっき俺達を連れてくるよう指示したのはお前つてことか。」

士がそう言つと、

「そのとおりじゃ。お主等にちと聞きたいことと頼みがあつてのう。」

「シャーファーが肯定し、そう言った。」

「マスター、立ち話もなんですから、こっちに座ったらどうです?」
美希が皆を椅子へと促した。

「それで?俺らに聞きたいことってのは何だ?」

簡単に自己紹介を済ませ、士がシャーファーに言った。

「その前にひとつ質問じゃ。」

シャーファーに視線が集まる。

「お主等はいつこの世界に来たんじゃ?」

シャーファーは言った。

その言葉にゲキレンジャーの面々が不思議そうな表情を浮かべている中、

「…何でわかった?」

士は少し眉をひそめてそう言った。

「ホホ、纏う気が珍しゅうてのう。」

シャーファーが笑いながらそう言った。

「何の話だよ、マスター?」

ケンがシャーファーに聞いた。

「そうですね、マスター。わかるように説明してください!」
ランも強い口調で言った。

「それはお主等から説明したほうが好いのではないかのう。」

シャーファーが言った。

ユウスケと夏海が士を見た。

「士、面倒な説明は君に任せるよ。」

海東にも丸投げされた士はため息をついた。

「…俺達はこの世界の人間じゃない。別の世界から来た。」

士は今までの経緯を話し始めた。

この世界には無数の世界が存在しており、自分達はその世界を巡り、旅して、それぞれの世界でやるべきことを探していること、そして、今回この世界に行き着いたこと。

「なるほどねえ。そういうことか。」

士の話聞き、ゴウがそう呟いた。

「そういうことって？」

ランはゴウに言った。

「おそらく俺が見たあのオーロラもこいつらと関係があるんだろ。」

ゴウはそう言った。

「オーロラ、ねえ……」

士がつぶやいた。

「それで、お主等がこの世界に来たのは今日ということじゃな？」
シャーファーが改めてそう言った。

「ああ。それで、俺達に聞きたいことってのは？」

士が言った。

「今回、臨獣殿が復活したのは、この世界にはない、何か別の力が働いていると見ておる。それについて何か知っていることはないかのう？」

シャーファーが言った。

「海東、お前何か知ってるんだろ？」

士は海東を見て言った。

「復活の装飾品。アクセサリ」

海東は言った。

「何だそれ。」

ケンが聞いた。

「僕のお宝さ。」

海東が答える。

「で、何で海東のお宝が関係あるんだ。…ひょっとして、お前、ま

さか、盗まれたのか？」

士は笑いながらそう言った。

「うるさいよ。」

海東が不貞腐れたように言った。

「まあまあ、二人とも。それで、誰が盗んだか分かってるんですか？」

夏海が二人をなだめながら、海東に聞いた。

「鳴滝か。」

士がそう聞いた。

「ああ。確か、この世界の獣にやったと言っていたね。」

海東はそう答えた。

「獣って、もしかして…」

ランが呟く。

「おそらくさっきの臨獣殿のことじゃろう。」

シャーファーが頷きながらそう言った。

「でもなんで、鳴滝さんが…」

ユウスケが言った。

「あいつが裏で動いているのはいつものことだろ。」

士が言った。

「大樹さん、復活の装飾品ってどういうものなんですか？」

夏海が海東に聞いた。

「言葉どおり、身に付けると復活するアイテムさ。それに、能力は倍の力になるという優れものだ。金色だから見ればすぐ分かるさ。」

海東が答えた。

「で、これからどうするんだ、お師匠さん？」

士はシャーファーに向かいそう言った。

「…そこで、お主等に頼みがある。」

シャーファーが士達を見つめ、そう言った。

―洞窟―

不意打ちに傷ついた臨獣拳使い達が戻ってきていた。

「まったく、さっきの奴は何なんですか?」

トデヒが不快感を隠すことなくそう言った。

「ホントホント!まったく嫌になっちゃうよ、楽しみにしてたのになあ……」

ツバタが拗ねたように言った。

「あやつ、中々やるようじゃのう。ホホ、これから楽しくなりそうじゃ。」

フロウクがいかにも楽しそうにそう呟いた。

「邪魔する…許さない…」

クーバが低く籠った声でそう言った。

「奴が何者が知りたいかね?」

「誰じゃ!」

突然聞こえた声に臨獣拳使い達は辺りを探った。

『コツコツ』

足音とともに洞窟の奥からある人物が姿を現した。

―スクラッチ体育館―

「夏海さん、ユウスケさん、よろしくお願いします!」

「よろしくねえ、夏海ちゃん。」

「こちらこそ、よろしく願います。」

「よろしく。…でも何すればいいのかな?」

ラン、ケン、夏海、ユウスケの四人は挨拶を済ませ、悩んでいた。

「私達はトデヒ対策でいいんですよね?」

「うん。だけど…」

夏海の言葉に頷きつつランは言葉を詰まらせていた。
こうなった経緯は少し前にさかのぼる。

「修行？」

士はシャーフーの言葉に眉をひそめた。

「そうじゃ。お主等にこの子達の修行に付き合ってもらいたい。」
シャーフーが言った。

「お主等って、私も…」

夏海が自信なさそうにそう言った。

「そうじゃよ。四人に手伝ってもらわねばならぬ。」
シャーフーはそう夏海に言った。

「…猫！俺、修行する！今のままじゃグルングルンだあ！」
今までずっと黙っていたジャンが突然そう言い、立ち上がった。

「士！修行、行くぞ！」

そう言うジャンは、士の腕をつかんだ。

「え、ちょ、おい！引っ張んな！」

士はジャンに引っ張られて特別室を出て行った。

「皆さんも、修行なら体育館を使ってくださいね。」

美希がニコリと笑いそう言うので、他の三人も修行に向かうことになった。しまった。

「私達も向かったほうがいいわよね？」

「そうだね、ジャン一人だと心配だし。」

ランとレツがそう言い、三人を体育館に案内した。

「じゃあ、さつき戦った相手を想定して修行しようか。」

海東は体育館に着くとそう言った。

「どうやって？」

ユウスケが聞いた。

「どうやって？それは自分で考えたまえ。士と虎君はもう始めてい

るようだね。ヒトデと戦ったチーター君とサイ君はユウスケと夏海が見るといい。僕は狼君とジャガー君を見るよ。」

海東は士とジャンの修行を見ながらそう言った。

「士！さっきあいつらにやったカメラライダー見せる！」

「カメラライダーじゃない、仮面ライダーだっての…！」

士はジャンの間違いを訂正しながら、バックルを腰に当てた。

『Kamen Ride Decade』

「よっし、俺も！たぎれ、獣の力！ビースト・オン！」

変身した士を見て、ジャンも気合が入ったように変身した。

「さて、こっちもはじめようか？…変身。」

海東がゴウとレッツに言った。

青い銃にカードを装填し、上空へ向かって引き金を引いた。

『Kamen Ride Diend』

電子音が響き、そこにはシアン色を基調としたボディにバーコードのような線が入った、仮面ライダーディエンドの姿があった。

「海東さん…」

「お前…」

「さ、君たちも早く変身したまえ。」

レッツとゴウの驚きを気にも留めず、海東は二人を促した。

「あ、ああ…」

「たぎれ、獣の力！」「響け、獣の叫び！」

「「ビースト・オン！」」

二人は顔を見合わせ、覚悟を決めたようにそう言った。

「あっちはもうはじめちゃったけど…」

「どうしますか、ユウスケ？」

ユウスケと夏海は士とジャン、海東とゴウ、レッツの様子を見て顔をあわせた。

「…あの、海東さんが変身できるってことは…」

「もしかして、二人も…」

ランとケンが遠慮がちに二人に聞く。

「私は、そんなにやったことないんですけど、ユウスケは…」

「一応…」

夏海とユウスケが答えた。

「あ、そうよ！」

ランが思いついたように言った。

「二人は私達とトデヒの戦いを見てたんですよね？」

ランが言った。

「はい。」

夏海が頷く。

「トデヒの戦いつて再現できますか？」

「なるほど。それで俺らの弱点を見つけらるってことか。」

ランの作戦を聞いたケンがそう言った。

「やってみる価値はありそうだね。」

ユウスケも頷いてそう言った。

いよいよ九人の修行が始まった。

第三話 グルングルン、修行開始（後書き）

はい。

中途半端な感じで、すみません。

わからない方のために、ジャン語を説明しておきます。

ソワソワ：臨獣殿出現時にジャンが察知し言う言葉。

グルングルン：負けてものすごく悔しいこと。

またいろいろ説明します。

拙い文章ですが、

読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5623m/>

仮面ライダーディケイド ~ New World ~

2011年10月7日13時42分発行